

大聖 釈尊

光 地 英 学

(一)

仏教そして禅の開祖であるとともに、本尊仏にまします大聖釈迦牟尼仏に対して、諸般の角度からの讃述の可能であることはいうまでもない。が筆者の論攻は、主として道元禅の視点からのものであることを先ず断つて置き度い。

宇宙的仏身の一顕現であり、分身的存在でありながら歴史上最も完全にその絶対性を具現している一大聖格者こそは大聖釈尊である。全宇宙を一釈尊にみる、更に諸仏をも釈尊の上にその存在性を看取する。諸仏菩薩その他一切を大日如来に統一結撰するのは、密教の仏身観である。この点、道元禅師の思想は密教と如同している。のみならず、元来、諸仏が釈尊の一仏身を中心として展開したものであることは、仏身観發達史の示すところである。「占察經」卷下に「一仏身即是一切諸仏身、一切諸仏身即是一仏身(大正十七・九〇七c)」という。一

切の諸仏はやがて一釈迦牟尼仏に帰一し、諸仏菩薩は万徳円満な釈迦牟尼仏の分身的存在となる。能統一の上からは唯一仏であり、所統一の上からは無量仏となる。無量仏がそのまま釈尊唯一仏に摂入される。一切仏の綜合統一体としての釈尊は、汎神的一者となし得るであろう。

大乘諸經典は西紀前後に成立、これらは經典作者の名においてではなくして、悉く仏説となっている。この点、釈尊の威徳が如何に鴻大であったかを示すものでもある。無量仏の徳が、そのまま釈尊一仏に帰入するとしても、強ち失当ではない。

いうまでもなく仏性に如同する法身が普遍的のものである。一切を総該するものであり、一切に平等に遍在するものである⁽¹⁾。かかる具有の仏性、換言すれば、法身に立てば一即多、多即一の理となつて、一が一切を統撰することともなる。この論理からしても、釈尊の諸仏統合身ということとは首

肯され得ることである。このことを「神通卷」に、「過去の諸仏は釈迦牟尼仏の弟子なり」といい、「即心是仏卷」の最後に、「いわゆる諸仏とは釈迦牟尼仏なり」という。過去の諸仏は釈尊の弟子であり、現在の諸仏も釈尊に統撰される。

過去仏の代表は過去七仏であるが、過去七仏について歴史性と超歴史性の二面が「嗣書卷」にみられる。即ち道元禪師が天童浄祖に、迦葉仏と釈迦牟尼仏の嗣法を歴史性の上から質問しているのに対し、如浄師が超歴史性の上から答えているのがそれである。いわゆる常識的には、過去七仏は信仰上の仏であつて、歴史性をおびた仏ではないと考えられる。しかし釈尊のような偉大な覚者が、釈尊以前の人類に皆無であつたということも速断できない。阿育王が過去七仏の一、拘那含牟尼仏の塔と伝えられるものに参拝している石柱がネパールに残っているとされる。また阿育王後の間もない頃の仏教彫刻が現存しているが、そのうちの一であるパールハト塔の欄楯に、七仏の菩提樹の浮彫がある。更に印度を旅行した法顯や玄奘は、いずれも過去仏の信仰が各地で現に行われていたことを報告している。眼を回らすに、地球に曾て一の大原始大陸があり、それが約二億年前にユーラシヤ（欧亜と北米）とゴンドアナの二つの大陸に分かれ、更に現在の姿になつたといわれている。なお太平洋の中央にムー大陸があつ

たが、今から約一二、〇六〇年位以前に陥没。大西洋にアトランティス大陸が同じく約一一、六〇〇年位前に陥没したともいわれる。また印度洋にレムリア大陸があつたが、約二〇〇万年前に陥没したとも推論されている。そして人類については、今から約八〇―一〇〇万年前の前期旧石器時代のアウストラロピテクス（猿人）の住んでいた時代があつた。そのような未開の時代でも、内面の人格性は別の事柄である。後期旧石器時代の更にその後期、マグダレニヤン期には石器が著しく進化し、壁画や彫刻等の美術すら発達している。その後が続く西紀前二万年から始まる中石器時代、更に新石器時代、金属器時代を通じて人類は次第に進歩して来た。⁽²⁾ またその間、人類の数の多いことは想像に余りあるものがある。これらの期間に釈尊の如き大覚者が全くなかつたとも断言し得られないであろう。尤もこれは憶測の域を出るものでないことはいうまでもない。

三世仏、殊に過去七仏に關説しているものに「増一阿含經」一、序品（大正三・五五）「同四四（大正二・七）」「仏説七仏經」（大正一・二〇）「七仏父母姓字經」（大正一・一）「毘婆尸佛經」下（大正一・一五）「大孔雀明王經」下（大正一九・四三三b、四三八a）「長部經典」一、大本經（南伝六・三六二）及び竜樹「易行品」（真宗聖教全書）等、その他尠くない。⁽³⁾ 過去七仏に限らないで、過去仏が次第にその数を増し、やがて過去莊嚴劫千仏名經にまで発展しているが、その基本をな

しているのは過去七仏である。しかもこの過去七仏を具体的に記している代表的のものは「長阿含」一、大本経である。即ち同経には過去七仏各々について出現の時期、出現時の人壽の数量・族姓・成道・説法の回数及び会衆弟子数・弟子・生子・父母の名、及び都城等の事跡を明記している。特に毘婆尸仏の出世の相について、兜率降生、右脇入胎、右脇出胎、大地震動、樹下降生、安行七步、二泉涌出灌沐、占師觀相、三十二相具足、輪王仏陀の予言、四門出遊、踰城出家、十二因縁逆順、兩觀成道、梵天勸請説法、鹿野苑最初説法、四諦法輪、六年還城説戒等、委細に涉っている。これは積尊の八相成道の伝記そのままであるから、過去仏の事跡は積尊の仏伝を移植したものに他ならない⁽⁴⁾。他面、大聖者積尊の人格徳性をこの世一生にての形成と考えられないことから、積尊は元来、すでに過去において成仏していた仏であったということの信仰へと発展した。そしてそれとともに、他面、積尊成正覚の法は空劫以前からのものであって、積尊の創始ではない、前にも触れたことでもあるが、過去において積尊の如く大法を悟って仏陀となったものがあつたと考えられ、積尊が無師独悟であるとされる反面、積尊もそれら諸仏の相続者であるとの信仰が起つた。かくして過去六仏の伝燈相承をみるに至つたものと思われる。「釈迦牟尼仏は七仏已前に成道すといへども、ひさしく、迦葉仏に嗣法せるなり」(嗣書

卷)とあるゆえんでもある。「即今の道現成は、諸仏相授して、釈迦牟尼仏にいたり」(法性卷)とあるのは、過去の諸仏の嗣続の宣表に他ならない。いう如く積尊は伝燈者でありながら、その積尊の本質生命である正覚内容は、時空を超越して法界を究め、一切処に充ち給う。かかる積尊の偉大性と慈悲性と相俟って、積尊は、歴史に制約されたまま歴史を超越する。ここに仏陀積尊の本仏思想が成り立つ。それはかの「法華経」五、如来壽量品十六所説に連なるものである。かかる本仏積尊について、禪師は次の如く表白している。

「過去の諸仏は釈迦牟尼仏の弟子なり」(神通卷)

「釈迦牟尼仏あるとき、阿難にとはしむ。過去の諸仏は、これたれが弟子なるぞ。釈迦牟尼仏のいはく、過去の諸仏はこれ我釈迦牟尼仏の弟子なり」(嗣書卷)

「おほよそ一切諸仏は、見釈迦牟尼仏、成釈迦牟尼仏するを、成道作仏といふなり」(見仏卷)

「諸仏七仏、おのおの仏に究尽せしめ、釈迦牟尼仏に成就せしむるなり」(法華転法華卷)

「可_レ見_ニ十方諸仏。可_レ見_ニ釈迦一仏_一也」(知事清規)

これは積尊の本仏であることを明示するものに他ならない。本仏とは久遠実成仏をいう。久遠は永遠、実成は自然性ではなくして、実際に修行しての成仏の意である。永遠の古えに修行して成仏された積尊をいう。同様に弥勒等の未来仏も積

尊の未來的顯現である。且つまた釈尊の歴史への延長が、三
 国伝燈祖師となる。

(二)

法の授受については、授ける師からすれば相授であり、受
 ける資からすれば相承である。法の授受においては師資の二
 面が裂破、能所主客一体であることが要求せられる。いうま
 でもなくこれは内面上、心の上からのことである。かかる相
 授の起原は、師から弟子へと内密に伝授する奥義書に遡り得
 る。これを仏教にしては、相授の史的嚆矢はいうまでもなく
 摩訶迦葉への伝法である。世尊が摩訶迦葉に半座を分ったこ
 とは、「華手経」^(大正十六・二二七b)「付法蔵因縁伝」^(大正五〇・二九八b)及び
 「統燈録」^(統藏一・二・乙九・一・二〇右)の所出である。しかしその付嘱の場
 所については「景德伝燈録」(一〇〇四)に記述せられてはい
 ない。ただ「同録」一に「吾以清浄法眼涅槃妙心、実相無相
 微妙正法_レ將_レ付_ニ於_ニ汝、汝当_ニ護持_一とあるのみである。そ
 れが「天聖広燈録」(一〇三六) ^(統藏一・二・乙八・四・六〇左)にては靈鷲山
 となつて付嘱の場所が明示されている。その後、「伝法正宗
 記」(一〇六一) ^(大正五・七一七)は、前掲「伝燈録」の継承に止まっ
 ているが、「聯燈会要」(一一八三)一に至り、靈鷲山上「吾
 有_ニ正法眼蔵涅槃妙心、実相無相、微妙法門、不立文字教外
 別伝_一 ^(統藏一・二・乙九・四・二二〇左下)」の展開となつている。⁶⁾道元はこれに関

し、「優曇華卷」の劈頭に「靈山百万衆前、世尊、拈優曇華
 瞬目。干_レ時摩訶迦葉、破顔微笑。世尊云、我有_ニ正法眼蔵涅
 槃妙心、付_ニ屬摩訶迦葉_一。」といっている。

これは伝法相承であるが、この伝法相承に対し、伝戒相承
 がある。北伝は伝法相承を主張し、摩訶迦葉―阿難陀―商那
 和修等の相承となしている。それに対し南伝は伝戒相承を主
 張し、優婆離―駄写迦―須那拘―悉迦婆―帝須等の相承とな
 している。一は内容精神主義であり、一は外形形式主義であ
 るとも見られる。伝法相承における印度の廿八祖説につい
 て、中国の文献としては「曹溪大師別伝」(七八一)荷沢神会
 「頓宗記」永嘉玄覺「証道歌」「宝林伝」(八〇一)「円覚経大
 疏鈔」(八二三)「聖胄集」(八九九)「祖堂集」(九五二)「伝燈
 録」(二〇〇四)「伝法正宗記」(一〇六一)「仏祖統記」(一二六
 九)等の襲承主張するところである。就中「宝林伝」が、
 「付法蔵伝」をはじめ「禅経序」僧祐「薩婆多部目錄」等に
 より、現今のような西天廿八祖説に整理したのである。⁸⁾天台
 にては「摩訶止観」一上の始めに、金口の相承として、釈尊
 から師子に至る付法相承を記している。これは「付法蔵因縁
 伝」によつては、師子比丘が罽賓国の弥羅掘王のために殺害
 されたから、付法がここで断絶しているとなすことによる。
 これに対し禅宗では、師子が命終以前すでに付法していたと

して、印度廿八祖の付法相承としている。禅宗印度祖師説にはなお廿四祖並びに廿九祖説がある。廿四祖説は「付法蔵伝略抄」の所説で、廿九祖説は即ち摩訶迦葉から達摩に至る西天廿九祖説で、李華^(七六六?)の撰文である「故左溪大師碑」⁽⁸⁾（全唐文三二〇）の唱道するところである。同碑の廿九祖説は、その内容を明かにし得ない。廿九祖説の内容を始めて具体的に掲げるのは、大曆末^(七七九)の「歴代法宝記」^(七七四)（大正五一・一）である。これは「付法蔵伝」の阿難と商那和修との間に末田地を加え、弥遮迦の次の婆須密を除いて仏陀難提への付嘱として廿四祖とし、師子菩提の次に舎那婆斯・優婆掘・須婆蜜多・僧伽羅叉・菩提達摩多羅の五祖を加え、しかも達摩多羅を菩提達摩となすものである。燉煌本「六祖壇經」は上掲廿四祖に、舎那婆斯・優婆掘・僧伽羅・婆須蜜多・菩提達摩の五祖を加えている。なお廿九祖説は最澄「内証仏法相承血脉譜」^(八一九)等の主張するところでもある。そして天台宗にては禅宗と違い、五祖弘忍下を大通・普寂・道璿・行表・最澄となしている。⁽⁹⁾禅宗では五祖下を六祖慧能を以て正系としている。この系譜は、教学組織のない禅門として、宗旨の命脈として最重要のものである。しかし尠くとも印度における付法相承は、印度仏教史の批判からしては、史実として認められ難いものとなっている。印度の付法祖師は上記の如く、中国において組織づけられたものに他な

らない。禅門にては、今やこのことは信が史実を超え覆うた態ちとなつてゐる。なおまた中国の相承系譜にても、全く問題がない訳ではない。

(三)

積尊の無師独悟せられたことは史的事実である。しかし深奥な靈界を通じての信仰として、積尊といえども嗣承のあることを示して、「仏道卷」に「釈迦牟尼仏の迦葉仏に参学しますますがごとく、師資ともに干今有在なり」と記述せられている。また「古仏心卷」に「祖宗の嗣法するところ、七仏より曹谿にいたるまで四十祖なり。曹谿より七仏にいたるまで四十仏なり。七仏ともに向上向下の功德あるがゆゑに、曹谿にいたり、七仏にいたる」という。過去七仏より六祖にいたるまでは、向下的に順に数えた因行果満降下の見方である。これを逆観すれば、六祖より七仏に至ることとなつて、果満円成向上の数え方となる。「辨註」(古仏心卷)はこの点を、「権実無二同一の道理を以ての玉ふ。七仏を列次せるは、実乗の同共一法身、一心一智慧の理体の正伝、釈迦仏より下は、権乗化儀の正伝云々」^(註全六、八二)と註釈している。向下来の時は七仏より正伝し、向上去の時は曹谿より正伝する。後仏に正伝するといつても、別に能所を分ち、前後を別にみるのではない。能所前後の対立は、仏生命に融合して一体となり

終つて対立を超える。釈迦牟尼仏の正法の摩訶迦葉に相承せられたことは贅言の要もないが、このことを「仏教巻」に「釈尊の正法眼蔵無上菩提は、ただ摩訶迦葉に正伝せしなり」と示されている。二者が一の生命、一味の大法に融合して限りなく相続する。かくして祖師から祖師へと師資相承する。道元は過去七仏から数えて第五十八代の仏であり、向上的には禅師から遡つて五十八代の祖師となる。六祖示衆の語からすれば「七仏より慧能にいたるに四十仏あり。慧能より七仏にいたるに四十祖あり」(嗣書卷)ともいい得る。我に死して如来の生命に生きる。億千万法するにも、本技一如である⁽¹⁰⁾。

(四)

相承は面授によって実となる。印度の廿八祖、中国の廿三祖、そして現在に至る日本の諸祖、いずれも師資の面授面稟である。このことを道元は「面授巻」に、「七仏の正伝にして迦葉尊者にいたる。迦葉尊者より二十八授して、菩提達磨尊者にいたる。菩提達磨尊者、みづから震旦国に降儀して、正宗太祖普覚大師慧可尊者に面授す」という。同じく同巻に「代々嫡嫡の祖師、ともに弟子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて、面授しきたれり。一祖一師一弟子としても、あひ面授せざるは、仏祖にあらざ」といつている。師資の

自内証の一如裡、釈尊一仏身の面授であり、一釈迦牟尼仏の歴史的通貫である。師面と資面の面面相対し、二面裂破裡、師は資に、資は師に蔵身して一面となり、無面となるところに、師資面面授の真面目の展開がある。

道元禅師が正法眼蔵中、屢々引証している六祖と南嶽との機縁の中、「吾亦如是、汝亦如是」がある。吾と汝との人格が、対立のままながら一如となり、一人格、一生命となつて、吾の時代から汝の時代へと伝承せられてゆく。面授は自己の面目ではなくして、「如来の面目を面授」(面授巻)するのである。それは不変の仏心が人格を通じ、変異する歴史の上への伸張である。相承伝承は従つて師資が互いに蔵身二面裂破し、師資通代親伝親授することを意味する。そのことは、師資の原語の示しているところでもある⁽¹¹⁾。以心伝心というより以身伝身ともいうべきであろうか。面授の語については、圭峯宗密の「禅源諸詮集都序」下二に「親稟三釈迦、代相承、一一面授」(大正四八・四一三a)とある。このことを殊に「面授巻」をはじめ「授記巻」「嗣書巻」に強調して余蘊がない。その一端を示せば

「迦葉尊者、したしく世尊の面授を面授せり、心授せり、身授せり、眼授せり」(面授巻)

釈尊の本仏思想からすれば、前記の如く釈尊は七仏以前からの仏である。しかし迹門の思想からすれば、迦葉仏に嗣続し

た仏陀である。「嗣書卷」に「釈迦牟尼仏は七仏已前に成道すといへども、ひさしく迦葉仏に嗣法せるなり」といつているのはこのことに他ならない。道元自らの面授については、「面授卷」に明言している如くである。

(五)

面授相承の内容本義は、如来の正法眼蔵の伝受である。このことを嗣法という。「仏道卷」にこの点、「仏仏祖祖付嘱し正伝するは、正法眼蔵無上菩提なり、仏祖所有の法は、みな仏付属しきたれり、さらに刹法のあらたなるあらず。この道理すなはち法骨道髓なり」と示している。従って面授が外形的な面であるとなすならば、正法眼蔵つまり仏の精神は内容的な面である。内容を実ならしめるためには、師が得道明心のものであり、資が契心証会のものであることが要求される。師資の精神内容が純熟して面授相承が行われる、というのが、尠くとも道元禅師としての嗣法相承の真面目であるといひ得る。

この意味から面授相承のないことに対し、「後漢の孝明皇帝、永平十年よりのち、西天東地に往還する出家在家、くびすをつぎて、たえずといへども、西天にして、仏仏祖祖正伝の祖師にあふといはず、如来より面授相承の系譜なし」(袈裟功德卷)と鋭く評破するゆえんがある。かかる面授相承の

ないのは、天然外道として排除せられる。即ち「もし嗣法なきは天然外道なり」(嗣書卷)

このように釈尊より祖々面授、嗣法相承して、自己の本師に至る。本師は従って現実に生きた釈尊となる。このことを「陀羅尼卷」に、「釈迦牟尼仏を礼拝したてまつり、供養したてまつるといふは、あるひは伝法の本師を礼拝し供養し、剃髪の本師を礼拝し供養するなり」という。同様の視点から「面授卷」に、「かるがゆゑに釈迦牟尼仏をおもくしたてまつり、釈迦牟尼仏を恋慕したてまつらんは、この面授正伝をおもくし尊崇し、難値難遇の敬重礼拝すべし。すなはち如来を礼拝したてまつるなり」といつている。本師の上に見釈迦牟尼仏する、礼拝供養を通じて釈尊を基盤とする三世一貫の純粹一血の相統相を伝法の本師にみる。これを更に面授嗣法の礼拝の上から徴してみる。豎継の拝では、資は師に蔵身し、師強資弱、師勝資劣となる。この場合、本師は現身の釈迦牟尼仏となる。横継の拝では、本師が資の中に蔵身し、資強師弱、資勝師劣となる。この場合、資は現身の釈迦牟尼仏となる。師資いずれも釈迦牟尼仏となり、二面の現身釈迦牟尼仏が謂ゆるならべるにあらず、つらなれるにあらずである。これは嗣法を通じて現活する三世一貫の釈尊を意味するものである。釈尊から歴代祖師を経て本師に至る。相承の仏祖を順観すれば、一釈迦牟尼仏の時代に生きた姿となる。逆

観して本師から相承祖師を経て釈尊に至る面からすれば、本師のうちに包摂されることとなる。まことに「仏祖を仰観すれば、一仏祖」(谿声山色卷)に他ならない。これは出家の場合である。それでは在家の場合如何か。その師僧である位置は、道元禅の精神から推考した場合、各寺の菩提寺の住持がそれに妥当する。弟子がその師匠を通ずる如く、檀家は菩提寺の住持を通じ、その上に伝燈の祖師、一宗の開山、更に釈尊をみる。

(六)

上述の如く、相承の内実は面授である。面授とは如来の正法眼蔵の伝受であることは既述したところである。正法眼蔵の伝受とは仏祖の心印の伝受をいう。仏祖の心印とは何か、それは釈尊の真精神である。釈尊の精神の相承が、仏心印の相承に他ならない。釈尊自内証の嫡嗣でなければ、正法の伝承授受はない。このことを禅門にみるに、

「自_三如来付_三法迦葉_二己来。以_レ心印_レ心、心心不_レ異。

(中略) 故以_レ心印_レ心、心心不_レ異」(「伝心法要」鐘陵録)

「(前略) 故長慶禪師曰、二十八代祖師、皆説_レ伝_レ心且_{不レ}説_レ伝_レ語」(「林間録」上)(統藏一・二乙・廿一、四・三〇六左上)

「師乃云、万里西来坐_三少林、燈燈相統至_三如今、(中略)

只如_三燈燈相統、心心相印、血脈不断_二、作麼生行履」

〔宏智広録〕四(統藏一・二・廿、九四・三六六右下)

相承といつても、特に教えたりするものがあるのではない。

正伝は自己本心の証伝である。杭州五雲「坐禅箴」に「歴代

祖、唯伝_三此一心_二」(「伝燈録」卅)(大正五一・四六〇a)といい、「荷沢

大師顯宗記」は「西天二十八祖共伝_三無住之心_二」(「前同」卅)

(同五一・四五九a)という。また宗密「禅源諸詮集都序」下二は「以_レ心

伝_レ嗣、唯達摩宗。心是法源。何法不_レ備(同四八・四一二c)といつてい

る。所謂、以心伝心の宣示に他ならない。しかもその以心伝

心について「裴相国伝心偈」は「心不_レ可_レ伝以_レ契為_レ伝。心

不_レ可_レ見以_レ無為_レ見。契亦無契、無亦無_レ無」という。不伝

である。証明することが伝えることに他ならないから、不伝

の伝といわねばならない。師資の二個の人格が一に融合し、

如来の生命、仏心に一体化される。師資は法としては師弟で

あるが、情としては父子であるといわねばならない。(13)かかる

師資の間、師の本心と資のそれとが触れ合ったところに、師

の真面目が資に相統され、弟子の本心証得となる。弟子が本

心を証得した時、師がそれを認証する。換言すれば、師資が

それぞれ本心証得に契会することが伝承に他ならない。真の

伝統相承は、資の個性の上に不断に新たなる創造をなしゆく

ものでなければならぬ。しかしこの本心証得の際、証悟に

非常に多くの深淺の段階があることの問題を擲んでいる。こ

れを広くすれば、釈尊と祖師方との証悟底は同か別かの問題

である。私はこの重大問題について今は、単に浅深と広狭とがあるとなしておくに止めたい。

道元禪師も一応、禪門の相承の一般に慣って以心伝心を主張している。「葛藤卷」に「先師古仏云、胡蘆藤種纏胡蘆。

この示衆かつて古今の諸方に見聞せざるところなり。はじめて先師ひとり道示せり。胡蘆藤の胡蘆藤をまつふは、仏祖の仏祖を参究し、仏祖の仏祖を証契するなり、たとへばこれ以心伝心なり」という。この先師天童の示衆語について「天童如浄語録」に「仏成道、上堂云、瞿曇、臘月八夜半走出山。

賊路羊腸曲、偷心虎背斑鈍置人天者一番。天童恁麼檢拳、且道諦当也無。落賺兒孫頭尺禿、胡蘆藤種纏胡蘆(統藏一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十)とある。胡蘆即ち、ひさごの藤(つる)が胡蘆を纏うことは、他に何物の雜り気もなく、純一無雜の状態であつて、真に唯仏与仏の究尽である。仏と仏との証契即通の消息である。これが以心伝心に他ならない。

(七)

面授嗣法の表信として、袈裟と鉢盂の授受がある。衣鉢と同じく、否それ以上に嗣承の信を表示するものとして重大な意義を有しているものは、嗣書である。嗣書の起原は衣鉢の如く古くはない。印度にはなく、中国の上代にもなく、かなり後代のものと思われる。道元禪師はその在宗時、法眼や雲

門下の嗣書を拜見して無上の感激に浸ったことを記し、嗣書の重要性を「嗣書卷」並びに「面授卷」「授記卷」を中心にして力唱している。禪師は如浄から「仏祖命脈、証契即通、道元即通」と記された嗣書を稟受している。嗣書と同意義の信を表するものに血脈のあることも忘れてはならない。嫡伝嫡承は一貫した法の相統であり、純粹一血の流統であるところに血脈の意義が存する。

(八)

いうまでもなく相承の源頭に位いするのは、大聖釈迦牟尼仏である。出家における師、在家における住持が、生きた釈尊としての信仰対象とされる基盤は、釈尊にあるのに他ならない。そしてその釈尊に対する信とともに、釈尊からの伝燈相承に対する信にある。他面、そのような相承に位いしている本師や住持によって、釈尊への信が昂揚されるといふ相互宛転裡、その主となるいわゆるの本尊は釈尊である。まことに「諸仏七仏、おのおの仏に究尽せしめ、釈迦牟尼仏に成就せしむるなり」(法華転法華卷)である。蓋し人間として欠点の多い師や住職が、しかも信仰の対象となるのは、釈尊に対する信の上に生かされるものであるからである。いう如く釈尊は本師本仏である。上述してきた如く、過去仏、釈尊、伝燈祖師は、悉く唯一の釈迦牟尼仏に帰着する。三世仏

は等しく教主釈尊よりの展開に他ならない。迹門において釈尊は史上の仏陀であるが、本門においては久遠成仏の仏陀である。三世仏は釈尊中心の一円相に他ならない。

されば禅師の釈尊の尊重性は多大であった。惟うに「眼蔵」における仏は釈尊に限られているといつてもよい。釈尊以外としては、観世音菩薩について、観世音菩薩・観自在菩薩・大悲菩薩・観音の名称にて十五ヶ所、弥勒菩薩について、弥勒如来・弥勒尊仏・弥勒の名称にて十一ヶ所である。また文殊菩薩については、文殊師利仏・文殊の名称にて七ヶ所、普賢菩薩については、普賢菩薩・普賢の名称にて五ヶ所であるなどが挙げられ得る。これに対し、釈尊については、釈迦牟尼仏・大師釈迦牟尼仏・釈迦牟尼如来・釈迦牟尼世尊・釈迦如来・釈迦仏・釈迦大師・釈迦老子・大師釈尊・釈尊・釈迦・釈迦老漢・釈迦菩薩・瞿曇・悉達太子等の名称で殆んど全巻到る所に見られ、実に一六〇ヶ所に及んでいる。⁽¹⁴⁾ 禅師のいかに釈尊中心であったかが窺われ得る。

元来、仏の功德は大小長短の比量を超えたものである。釈尊八十年の在世は、多劫に比する時は甚だ短いようであるが、全仏教をば八十年に撰して、永劫を貫いた仏教をその人格によって展開されたものであるから、肉身は滅しても、仏陀の教えよりみた真の生命としての仏身は永遠不滅であり、無限の発展性を包蔵している。天台では釈尊の超歴史的な

久遠仏と共に、その垂迹としての史上の釈尊との本迹二仏を説く。しかし禅師の釈尊観には、本地と垂迹との差別はない。本地仏とすれば悉く本仏の始中終である。垂迹仏も同様にいい得る。その間、本末はない。ただ本迹一如三世通貫の釈尊があるのみ。本迹二仏を弁立する天台にても、本迹二仏を一等にみる思想も皆無ではない。「法華玄義」七上に、六義を以て本地垂迹を弁じ、「本迹雖殊不思議一也」^(大正卅三・七六四b)と結着し、また覚運の「念仏宝号」に、「南無久遠実成常在靈山三世益物本迹一体毘盧遮那周遍三千一代教主釈迦如来」^(天台小部集釈一・目一四〇a)となしているなどである。しかし道元のような積極性はない。のみならず道元禅の仏陀は、時空を貫いて躍動する生命的行仏としての釈尊である。遡源的には如来による統一である。統一としての如来の生命が時代と環境に生きてゆく、それが釈尊の行仏に他ならない。禅師が「安居卷」に十仏名「赴粥飯法」に十一名を挙げている。いうまでもなくその場合の釈尊は千百億化身釈迦牟尼仏であつて応化身である。応化の釈尊は、生命的行仏の仏陀であるという意義を荷負うものである。師資相統、面授もこの上に意義づけられる。ここに禅師釈尊観の特色がある。

註

(1) 「妙法蓮華経優婆塞捨」には次の如くある。「法身平等者、仏性法身更無差別故」^(大正廿六・一六六b)「諸仏如来法身之性同」^(大正廿六・一六六c)

「一乗体者、謂諸仏如来平等法身」(大正廿六・一七a)

(2) 松下三省「人間学」一九二—三頁参照。

(3) 「宗教研究」一九〇号所載、宮坂宥勝「過去七仏と聖仙神話」に、過去七仏について、七仏伝説、七仏七道樹、七仏帰依文、七仏咒の四類に、内容別から經典名を列挙している。そして阿含系で七仏伝説を伝えるもの以外は、総て密教經典中に伝えるものであるとなしている。

(4) 忽滑谷快天「禅学思想史」上、二七三頁。平川彰「律蔵の研究」三六六頁。渡辺照宏「愛と平和の象徴、弥勒経」一七頁。稻城選恵「法蔵菩薩論」一三三頁。佐々木月樵「印度支那日本浄土教史」(佐々木月樵全集) 五八頁等。

(5) 例えば「五分律」十五に、世尊の言として「我行不_レ由_レ師、自然通_ニ聖道_ニ」(大正廿二・一〇四a)

(6) 正法伝付について、「圓悟心要」下、送_ニ雷公達教授_ニに次の如くある。「靈山釈迦文(中略)独金色頭陀微笑、黄面老廻開_レ懷展_レ手、了不_ニ覆蔵_ニ。便道、吾有_ニ正法眼蔵涅槃心_ニ、分_ニ付之_ニ、令_ニ善護持_ニ」(統蔵一・二・廿五・四・三七三右下)

(7) 「仏祖統紀」五に、摩訶迦葉尊者から廿三祖師子尊者まで記載、末田地尊者は、阿難旁出として廿三祖のうちには入れていない。

(8) 仏以_ニ心法_ニ付_ニ大迦葉_ニ、此後相承凡二十九世、至_ニ梁魏間_ニ、有_ニ菩薩僧菩提達摩禪師_ニ、伝_ニ楞伽法_ニ。

(9) 天台宗宗務庁「天台宗綱要」戒史五頁。関口真大「天台止觀の研究」一八五頁。

(10) 釈尊一仏の歴史的展開面については、「坐禅箴卷」の薬山の非思量に対する評釈も注目されるべきものと思われる。

(11) 立花俊道「原始仏教と禅宗」一八一頁

(12) 寛文十三年初夏、文台屋治郎兵衛蔵板「黄檗山断際禪師伝心法要宛陵録卷尾裴相国伝心偈」(駒大図書館蔵)

(13) 「四分律」卅三に「和尚看_ニ弟子_ニ、当_レ如_ニ兒意_ニ看_ニ。弟子看_ニ和尚_ニ、当_レ如_ニ父意_ニ、展転相敬、重相瞻視_ト」(大正廿二・七九九c)

(14) 加藤宗厚「正法眼蔵要語索引」参照